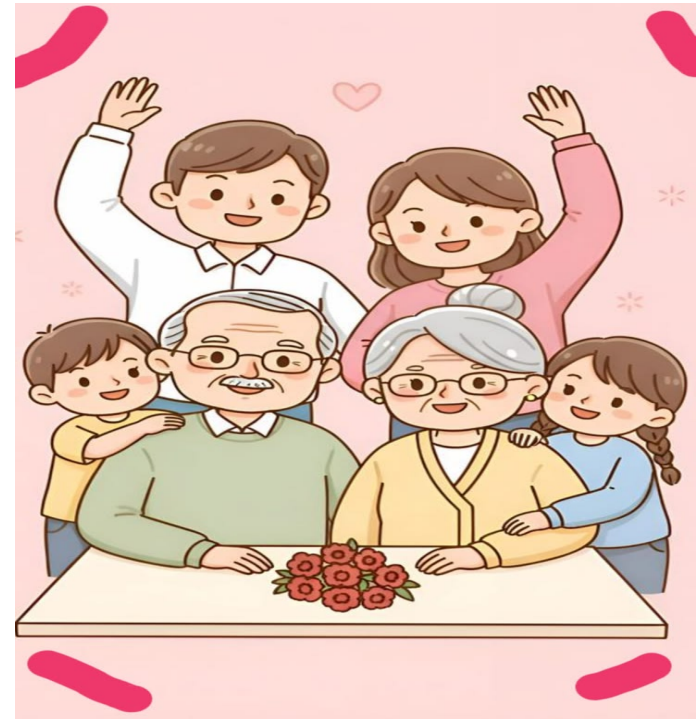

わたしの歩いてきた道

— 田中幸子 —

Tanaka Satiko





この本は、私の七十七年の人生を振り返り、
家族や大切な人たちに伝えたい想いをまとめたものです。

あの日の空の色、お母さんの手の温もり、
初めて夫に出会った日の胸の高鳴り。

この本が、いつか私がいなくなった後も、
家族の本棚の片隅に残ってくれたら嬉しいです。

令和七年 春
田中幸子

History

1940s

1949 愛知県一宮市に生まれる。父・正雄は繊維工場の職人、母・ハルは内職で反物の検品をしていた

1950s

1951 兄と近所の真菰池で遊び、夕焼けを見るのが日課に

1956 一宮市立北小学校入学。図書室に通い詰め、本の虫になる

1958 一宮市立北中学校入学。文芸部に入部

1960s

1962 国語の山田先生に作文を褒められ、県コンクールで佳作に選ばれる

1965 愛知県立一宮高校入学。太宰治や夏目漱石に夢中になる

1968 名古屋市内の繊維会社に就職。会社の寮で初めての一人暮らし

1970s

1971 取引先の営業マン・田中誠一と出会う。名古屋駅前で偶然の再会、相合傘

1972 田中誠一と結婚。名古屋市内のアパートで新婚生活を始める

1973 長男・健太 誕生

1976 長女・美咲 誕生

1980s

1980 パート勤務開始（スーパーマーケット）

1985 健太が参観日で「お母さんの好きなところ」の作文を発表

1990s

1993 長男・健太 結婚

1996 初孫・陽菜 誕生

2000s

2003 夫・誠一 定年退職。夫婦で四国八十八ヶ所を四十日間かけて歩く

2008 夫・誠一 くも膜下出血で他界（享年62歳）

2010s

2010 美咲に勧められ俳句教室に通い始める

2020s

2021 喜寿を迎える

2025 本書完成

PersonalData



田中 幸子 （たなか さちこ）

生年月日 1949年10月15日（77歳）
出身地 愛知県・一宮市
血液型 A型
趣味 俳句、読書
特技 煮物
座右の銘 明日は明日の風が吹く
職業 主婦（元スーパーパート）

12の質問

尊敬する人物は？
母・ハル。どんな時も
笑顔を絶やさなかった。

行ってみたい場所は？
もう一度四国を歩きたい。
今度はゆっくりと。

コンプレックスは？
背が低いこと。でも
最近は気にならなくなりました。

一番の思い出は？
夫と歩いた四国遍路。
大窪寺で手を握ってくれたこと。

好きなスポーツは？
相撲の中継を見るのが
好きです。

好きな本は？
赤毛のアン。小学生の
時に会って以来、
何度も読み返しています。

好きな映画は？
男はつらいよ。寅さんの
不器用な優しさが好き。

好きな色は？
桜色。春になると
気持ちが明るくなる。

好きな動物は？
猫。子供の頃、近所の
野良猫をよく世話して
いました。

好きな乗り物は？
電車。通学も通勤も
電車でした。窓の外を
見るのが好き。

好きな季節は？
秋。コスモスが咲く
季節が一番好きです。

好きな場所は？
真菰池のほとり。
子供の頃の夕焼けの
風景が忘れられない。

亡き夫の本棚は、今も増え続けている 私のものがたり

幼少期から本の虫だった田中幸子さん。

「小説家になりたかった」という夢は
叶わなかったが、これまでの人生には
語るべきことがたくさんあった。

夫・誠一さんとの出会い、子育ての日々、
そして突然の別れ。

「普通の毎日がいちばん尊い」と語る
幸子さんに、これまでの歩みを聞いた。



第一章 一宮の風に吹かれて ～ 幼少期 ～

繊維の街で生まれて

私は昭和二十四年の秋、愛知県一宮市で生まれました。

繊維の街として栄えた一宮は、どこからともなく機織りの音が聞こえてくるような、活気に満ちた街でした。

朝は工場の汽笛が目が覚め、夕方になると糸を染める甘い匂いが風に乘って漂ってくる。

あの音と匂いが、私の原風景です。

父・吉田正雄は地元の繊維工場で働く職人で、朝早くから夜遅くまで、油にまみれて働いていました。

母・ハルは内職で反物の検品をしていました。居間の隅に積み上げられた反物の山。母は一枚一枚丁寧に広げて、傷がないか確かめていました。

三人きょうだいの真ん中で、兄と妹に挟まれた私は、「サッチちゃんは要領がいい」とよく言われたものです。

兄は二つ上の正夫、妹は三つ下の和子。正夫兄ちゃんは腕白で、和子はおとなしい甘えん坊でした。

家は六畳二間の小さな借家でした。台所の土間には、母がいつも煮物を作っている鍋がありました。

大根と油揚げの煮物が多かったのですが、あの味は今でも私の「おふくろの味」です。

母は料理をしながらいつも鼻歌を歌っていました。何の曲だったかはもう思い出せませんが、あの鼻歌が聞こえると、安心したものです。

お正月にはお雑煮を作ってくれました。白味噌仕立ての、貝だくさんのお雑煮。お餅を何個食べたか、兄と競争するのが毎年の恒例でした。

寡黙だけど優しくった父

冬になると隙間風が入り込み、きょうだい三人で一つの布団にくるまって眠りました。

「寒いねえ」と言うと、母が湯たんぽを作ってくれます。あの、じんわりとした温かさは、今でも忘れられません。

朝になると湯たんぽのお湯がぬるくなっていて、母がそれで顔を洗わせてくれました。

「もったいないからね」と笑う母の顔が浮かびます。

父は寡黙な人でしたが、日曜日になると兄と私を連れて真菰池まで散歩に連れて行ってくれました。

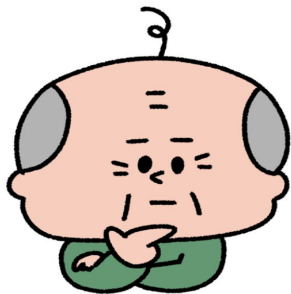
池のほとりに腰を下ろし、黙って水面を眺める父。たまに「あの鳥はカワセミだ」と教えてくれるのが嬉しくて、私は父の大きな背中にくっついて歩きました。

帰り道には駄菓子屋に寄って、兄と私に一つずつ飴を買ってくれます。

父の手は大きくて、ごつごつしていて、でもその手に引かれて歩く帰り道が大好きでした。

妹はまだ小さくて母と留守番。

「お兄ちゃんばっかりずるい」と泣く妹に、父が買ってきた飴を一つ渡すのが、私の役目でした。



本が友だちだった小学生時代

小学校に上がると、私は本の虫になりました。

図書室の窓際の席が私のお気に入りの場所で、休み時間になると誰よりも早く駆け込んでいました。

担任の先生に「本ばかり読んでいないで外で遊びなさい」と注意されたこともあります、やめられませんでした。

小学三年生の時に『赤毛のアン』と出会いました。想像力ひとつで毎日を輝かせるアンの姿に心を奪われ、夜は布団の中で懐中電灯を頼りにこっそり読書。

兄に「目が悪くなるぞ」と叱られても、やめられませんでした。

四年生になると「サッチちゃんの日記」を書き始め、自分の気持ちを言葉にする楽しさに目覚めました。

日記には「今日のおやつはふかし芋だった」とか「兄ちゃんがカエルを捕まえてきた」とか、他愛もないことばかり。でもあの頃の私には、毎日が書き留めておきたいことでいっぱいでした。

五年生の時、担任の先生が作文を読み上げてくれて、「田中さんのように、見たままを素直に書きなさい」とクラスに紹介してくれたことがありました。

恥ずかしかったけれど、嬉しかった。

あの日から「書くこと」は私の特別な宝物になりました。

放課後は近所の子どもたちと遊びました。缶蹴り、かくれんぼ、ゴム跳び。

中でも好きだったのは真菰池のほとりで遊ぶことでした。夕方になると空が茜色に染まり、池の水面にその色が映り込みます。

「サッチちゃん、帰るよー」と兄の声がすると、夕焼けの田んぼ道を三人で歩いて帰りました。

稲穂の匂い、用水路を流れる水の音、遠くで犬が吠える声。

トンボが低く飛んでいると「明日は雨だね」と兄が言う。家に着くと、台所から味噌汁の匂いがして、母が「おかえり、手を洗いなさい」と迎えてくれます。

ちゃぶ台を囲んで食べる夕ご飯は、いつも賑やかでした。

兄が学校であったことを話し、妹が食べこぼしをして母に叱られる。

父は黙々とご飯を食べながら、時々笑っていました。

あの帰り道の風景は、七十七年経った今でも、目を閉じるとはっきり浮かんできます。



第二章 あなたの文章には温度がある ～ 青春時代 ～

人生を変えてくれた山田先生

中学では文芸部に入り、国語の山田先生に出会いました。
山田先生は三十代半ばの女性の先生で、いつも髪をきちんとまとめて、黒縁の眼鏡をかけていました。
声が低くて落ち着いていて、教室に入ってくるだけで空気がピンと張り詰めるような、そんな先生でした。
授業中、先生が朗読する宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』は、教室の空気ごと物語の中に引き込まれるようでした。
あの声は今でも耳に残っています。

文芸部では月に一度、部員が書いた作文を回し読みする会がありました。
私はいつも緊張しながら自分の文章を差し出していました。
他の部員は物語や詩を書く子が多かったのですが、私はいつも身の回りの出来事を書いていました。
母の手の甲のシワのこと、通学路の猫のこと、夕焼けの色が昨日と今日で違うこと。

ある日の放課後、先生が私を職員室に呼びました。
「田中さん、あなたの文章には温度がある。この作文をね、県のコンクールに出してみませんか」
驚きました。結果は佳作。
自分の書いた文章が認められたことが、飛び上がるほど嬉しかったのです。
母は「あんた、すごいじゃないの!」と涙ぐみ、父は黙ってうなずくだけでしたが、近所に自慢していたそうです。

賞状は額に入れて茶の間に飾られました。
あの賞状を見るたびに、胸がくすぐったくなったものです。
卒業の日、山田先生が一冊のノートをくれました。
「これに、たくさん書きなさいね」
表紙に桜の花が描かれた、少し上等なノート。
そのノートは、高校でも大事に使いました。
最初のページに書いたのは、
「いつか、誰かの心に届く文章を書きたい」という一行でした。

太宰に夢中だった高校時代

高校では太宰治や夏目漱石に夢中になりました。
通学路の途中にある小さな古本屋にもよく立ち寄りました。
「丸山書店」という、間口の狭い、薄暗いお店。
おじいさんが「お嬢ちゃん、今日はこれがおすすめだよ」と棚の奥から本を出してくれるのです。
お小遣いの大半はここで消えていきました。
丸山書店のおじいさんは、私が読み終わった本の感想を聞くのが好きで、
「なるほどねえ、そういう読み方もあるか」といつも感心したように頷いてくれました。
太宰の『斜陽』を初めて読んだ日、
帰りの電車で涙が止まらなくなって困りました。
隣に座っていたおばさんが心配そうに
「大丈夫?」と声をかけてくれたことを覚えています。



本気で小説家を目指していた

友人の道子ちゃんとは昼休みに屋上で将来の夢を語り合いました。
道子ちゃんはお花屋さんになりたいと言い、私は「小説家になりたい」と恥ずかしそうに打ち明けました。
「幸子ならきつとなれるよ」
その言葉を信じて、私は密かに短編小説を書き始めていました。
大学ノートに鉛筆で、誰にも見せない物語。
主人公はいつも、田舎から出てきた女の子でした。
夜、布団の中でその日書いた文章を読み返しては、
消しゴムで直し、また書き直す。
あの頃の私は、言葉の中に自分の居場所を探していたのかもしれませんが。
ノートは高校卒業までに五冊になりました。



文化祭で文芸部の冊子に短編を載せた時、知らない先輩から「あの話、良かったよ」と言われて、一日中ふわふわした気持ちで過ごしました。
道子ちゃんに報告すると「やっぱりね」と自分のことのように喜んでくれました。
もしかしたら本当に小説家になれるかもしれない。
大学の文学部に行って、もっと書く力を磨きたい。
そんな夢が、少しずつ大きくなっていきました。

大学に行けなかった悔しさ

でも高校三年の秋、父にこう言われたのです。
「女の子に大学は必要ない。早く手に職をつけて、嫁に行きなさい」
悔しくて悔しくて、自分の部屋で声を殺して泣きました。
山田先生がわざわざ家まで来て父を説得しようとしてくれましたが、
父は頑として首を縦に振りませんでした。
玄関先で先生が帰っていく背中を見ながら、
「すみません」と心の中で何度も謝りました。
あの時代、女の子が大学に行くことは、
まだまだ当たり前ではなかったのです。
あの時の悔しさは、今でも胸の奥にチクリと残っています。
卒業式の日、道子ちゃんが「幸子、絶対書き続けてね」と泣きながら言ってくれました。
「うん、約束する」と答えた声が震えていたのを覚えています。
でも、あの悔しさがあったからこそ、
私はずっと本を手放さなかったのだと思います。

第三章 雨の日の相合傘 ～ 就職・出会い・結婚 ～

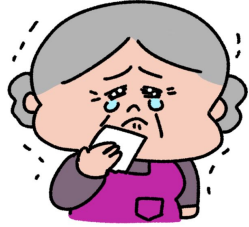
泣いてばかりだった一人暮らし

高校卒業後、名古屋市内の繊維会社に就職しました。
一宮から名古屋へ。
たった三十分の距離でしたが、私にとっては大冒険でした。
入社式の朝、母が玄関先で「しっかりやるんだよ」と言って、
新しいハンカチを一枚持たせてくれました。
白地に小さな花柄の、少しよそゆきのハンカチ。
緊張でカチカチになった手で握りしめて、電車に乗りました。

会社の寮に入り、初めての一人暮らし。
四畳半の小さな部屋に、布団と小さなちゃぶ台。
窓からは隣のビルの壁しか見えません。
最初の一週間は毎晩泣いていました。
実家の布団の匂いが恋しくて、母の煮物の味が恋しくて。
でも、寮の先輩の石川さんが
「泣いてたらお腹空くでしょ」と
おにぎりを握ってくれて、その優しさに救われました。
石川さんは三年先輩で、仕事のことも生活のことも
何でも教えてくれる、姉のような人でした。
朝の通勤電車の乗り方、お昼ご飯のお弁当の作り方、
上司への言葉遣い。一宮の田舎娘だった私に、
名古屋での暮らし方を一から教えてくれました。

初任給で買った太宰の『斜陽』

仕事は経理課の事務。正直、単調でしたが、
自分の手で稼いだお給料で本を買える喜びは格別でした。
初めてのお給料日、まっすぐ栄の丸善に向かいました。



棚の前で三十分も迷って選んだのは太宰治の『斜陽』。
あの頃は一冊百五十円くらいでした。
レジで自分のお金を払った時の誇らしさは、
今でも胸が温かくなります。
それからは毎月のお給料日に必ず一冊は新しい本
を買うと決めていました。

休日には寮の仲間と栄の街を歩きました。
デパートのショーウィンドウを眺めたり、
喫茶店でクリームソーダを飲んだり。
一宮にはなかった華やかな世界に、
目を丸くする毎日でした。
日曜日の夜は寮に戻って手紙を書きました。
「お母さん、名古屋は何でもあるよ。
でもお母さんの煮物だけはどこにもないよ」
母からの返事はいつも短くて、
「体だけは気をつけなさい」の一行だけ。
それがどれほど温かかったか、
あの頃の私にはまだわかっていませんでした。

太宰が繋いでくれた縁

誠一に出会ったのは、入社三年目の秋でした。
取引先の営業マンとして会社に来た彼は、
真面目で口数が少なく、最初はあまり印象に残り
ませんでした。
でも、ある日の帰り道、名古屋駅前で偶然会いました。
突然の夕立の中、傘を持っていない彼に

二人で歩いた名古屋の雨の街。
狭い傘の下で肩が触れるたびに、
彼が「あ、すみません」と言うのがおかしくて、
私は笑いをこらえていました。

「田中さんは、本が好きなんですか」
「はい、太宰が好きです」
「僕も。『人間失格』を読んだ時は衝撃でした」
太宰好きの男性に出会えるなんて。
あの瞬間、胸がドキドキしたのを覚えています。
駅に着いた時、雨はもう上がっていました。
「傘、ありがとうございました」と丁寧にお辞儀
する彼に、
「また降るかもしれませんから、お貸しますよ」
と言うと、
「じゃあ、お返しする時にまた」と少し笑いました。
あれが、私たちの始まりでした。

毎週土曜日の喫茶店デート

それから二人で喫茶店に通うようになりました。
名古屋駅から少し歩いたところにある
「ぶらじる」という小さな喫茶店。
木のカウンターとレンガの壁、
コーヒーの香りが漂う静かなお店でした。

毎週土曜日の午後三時、
向かい合って本の話をするのが私たちのデート
でした。
映画でも遊園地でもなく、ただ珈琲を飲みながら
本の話をする。
地味なデートでしたが、私にはそれがたまらなく
幸せでした。

「今度、僕の好きな本を持ってきます」
そう言って翌週、彼が持ってきたのは夏目漱石の
『こころ』でした。
「この本の先生の気持ちか、少しわかるんです」
と言った彼の横顔が、今でも目に浮かびます。

誠一らしい不器用なプロポーズ

半年ほど通ったある日、誠一が真剣な顔で言いました。
いつもより早くお店に来ていた彼は、
珈琲にも手をつけず、テーブルの上で指を組んでいまし
た。
「どうしたの？」と聞くと、しばらく黙ってから、
「僕は口下手で、気の利いたことは言えません。
でも、ずっと一緒に本を読んでいきたいんです」
それがプロポーズでした。
花束もなければ、指輪もない。
喫茶店のカウンターで、珈琲も飲まずに。
でも、それが誠一らしくて、私は「はい」と答えました。
マスターが気づいて「おめでとう」と
ケーキを一切れサービスしてくれました。
誠一は耳まで真っ赤になっていました。

両家への挨拶は誠一にとって大仕事でした。
うちの父の前では緊張で声が震えて、
「お嬢さんをください」がうまく言えず、三回やり直し
たそうです。
父は最後に「まあ、真面目そうだからいいだろう」と
言ってくれました。

昭和四十七年の春、私たちは結婚しました。
式は名古屋市内の小さな神社で。
白無垢を着た私を見て、誠一が「きれいだ」と小さく呟
いたのを、
隣にいた母だけが聞いていたそうです。

新居は六畳一間にキッチンだけの小さなアパート。
壁一面に本棚を置いて、二人の本を並べたあの部屋が、
私たちの最初の「家」でした。
引っ越しの日、段ボール箱の大半が本だったので、
引っ越し業者のおじさんが「本屋さんですか？」と笑っ
ていました。
窓辺に二つ並べた座布団に座って、
それぞれの本を読む静かな夜。
時々顔を上げて目が合うと、
誠一が少し照れたように笑う。
あの穏やかな時間が、私たちらしい幸せでした。

第四章 カレーと参観日と四国遍路 ～ 家族の日々 ～

初めて抱いた我が子の温もり

昭和四十八年、長男の健太が生まれました。
三千二百グラム。
初めて腕に抱いた時の、あの軽さと温かさ。
「こんなに小さいのに、ちゃんと生きているんだ」
と思うと、涙が止まりませんでした。
誠一は分娩室の外でずっと待っていてくれて、
赤ん坊の顔を見た瞬間、黙ったまま何度も頷いていました。
言葉にしない人だけど、その顔は今でも忘れられません。

子育ては想像以上に大変でした。
夜泣きで寝られない日々が続き、
抱っこしてもおっぱいをあげても泣き止まない。
「私はちゃんとした母親になれているんだろうか」
と不安に押しつぶされそうな夜もありました。

誠一は仕事が忙しく、帰りはいつも遅い。
一人で赤ん坊と向き合う時間が長くて、
実家の母に電話をかけたこともあります。
「泣いてるのは元気な証拠。大丈夫、そのうち楽になるから」
母の声を聞いただけで、張り詰めていたものがほどけました。

三年後に長女的美咲が生まれ、毎日はさらに慌ただしくなりました。
活発な健太と、おっとりした美咲。
性格が正反対の二人の子育ては、笑い涙の連続でした。
健太が走り回る後ろを美咲がよちよち追いかける。
転んで泣く美咲を、健太が「だいじょうぶ？」と頭を撫でてあげる姿に、胸が熱くなりました。

美咲が幼稚園に入ったのを機に、
近所のスーパーでパートを始めました。
レジ打ちや品出しを覚えるのに必死でしたが、
お客さんの「ありがとう」が嬉しくて、
十五年間も続けることになりました。
お給料で子どもたちの絵本を買うのが楽しみでした。
健太は恐竜の図鑑、美咲は『ぐりとぐら』がお気に入り。
寝る前に読み聞かせをすると、
二人とも私の腕にしがみついて眠ってしまう。
あの重みが、今も腕に残っているような気がします。

息子の作文に泣いた参観日

忘れられないのは、健太が小学一年生の参観日のこと。
「お母さんの好きなところ」という作文を発表しました。



「お母さんの好きなところは、
ぼくが泣いている時にぎゅっとしてくれるところです。
あと、カレーがおいしいところです。」

教室の後ろで聞いていた私は、
恥ずかしさと嬉しさで顔が真っ赤になりました。
隣に立っていたお母さんが「いい息子さんね」と
小声で言ってくれて、余計に泣きそうになりました。
あの日の夕飯は、もちろんカレーを作りました。

誠一なりの愛情表現

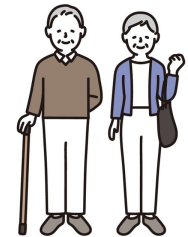
誠一は結婚してから口数の少ない人でした。
「ありがとう」も「美味しい」もほとんど言わない。
でも、私の誕生日には必ず本を一冊プレゼントしてくれました。
丸善の紙袋を照れくさそうに差し出して、「これ」と一言だけ。
「おめでとう」すら言わない。
でも選んでくれる本がいつも絶妙でした。
ある年は向田邦子、ある年は幸田文。
私の好みをちゃんとわかっている人だなと思いました。
三十年以上途切れなかったその習慣が、
誠一なりの愛情表現だったのだと今はよくわかります。

美咲が中学生になった頃、ある日ふと聞きました。
「お母さん、昔の夢は何だったの？」
「小説家になりたかったの」と答えると、
美咲は真っすぐな目で言いました。
「今からでもなれるよ」
十四歳の娘のまっすぐな言葉。
あの一言は、私の心の奥にずっと残り続けました。
あの時の美咲の目の輝きを、私は一生忘れないでしょう。

子どもたちはあっという間に大きくなりました。
健太は大学を出て社員に、美咲は看護師の道へ。
それぞれの巣立ちの日、玄関先で見送りながら、
かつて母が私にそうしてくれたように、
「しっかりやるんだよ」と声をかけました。

二人で歩いた四国遍路

子どもたちが巣立ち、誠一が定年を迎えた平成十五年。
急に静かになった家で、二人きりの生活が始まりました。
ある日、誠一が新聞を読みながらぼつりと言いました。
「四国を歩こうか」
四十日間、毎日二十キロ以上歩く遍路の旅です。
足にマメができ、腰が痛くなり、
何度も「もう帰ろう」と思いました。
でも、隣を黙々と歩く誠一の背中を見ると、不思議と足が前に出るのでした。



道中、宿のおばあちゃんが「お接待です」とみかんをくれたこと。
同じ道を歩くお遍路さんと励まし合ったこと。
雨の日も風の日も、ただひたすら歩きました。
ある夜、宿の布団に入りながら、
誠一がぼつりと言いました。
「こうして二人で歩けるのは、幸せだな」
三十年以上一緒にいて、あんな言葉を聞いたのは初めてでした。

八十八番目の大窪寺に着いた時、
誠一が初めて私の手を握りました。
「よく歩いたな」
たった一言でしたが、涙が溢れました。

第五章 秋桜の葉 ～ 別れ、そして今 ～

突然すぎた別れ

平成二十年の冬、誠一は急に倒れました。くも膜下出血でした。その朝、いつものようにコーヒーを淹れて、いつものように新聞を読んでいた誠一が、突然「うっ」と声を上げて崩れ落ちました。病院に駆けつけた時、もう目を開けてくれませんでした。享年六十二歳。あまりにも早すぎる別れでした。

葬儀の後、一人になった家は信じられないほど静かでした。新聞を取りに行く足音がない。コーヒーを飲む音がない。「おい」と呼ぶ声がない。食事の支度をする時、つい二人分のお米を研いでしまう。テレビを見ていて「ねえ、見て」と言いかけて、隣に誰もいないことに気づく。そんな日々が半年、一年と続きました。

健太も美咲も心配して頻繁に電話をくれましたが、「大丈夫よ」と答えるのが精一杯でした。夜が一番辛かった。誠一が読んでいた本がそのままテーブルに置いてあって、片づけることができませんでした。しおりが挟まったまま、ページが開かれたまま。まるで誠一がまだ読んでいる途中のような気がして。



春が来て桜が咲いても、夏が来て蝉が鳴いても、季節だけが勝手に進んでいくようでした。買い物に行っても、誠一が好きだった焼き鮭を手にとってしまう自分がいました。

六十歳から始めた俳句

二年ほど経った頃、美咲に勧められて俳句教室に通い始めました。「お母さん、昔の夢は小説家だったでしょう？」俳句なら十七文字だから、始めやすいんじゃない？」

最初は気乗りしませんでした。六十を過ぎて新しいことを始めるなんて。でも、先生の「俳句は心のカメラです」という言葉に惹かれ、少しずつのめり込んでいきました。散歩の途中で立ち止まって、空を見上げて、花を見て、言葉を探す時間が増えていきました。季節の移ろいに気づくようになると、毎日が少しずつ色を取り戻していくような気がしました。俳句仲間もできて、月に一度の句会が楽しみになりました。

初めて句会で褒められた句。

亡き夫の 本の葉に 秋桜

先生が「この句には、悲しみと愛情が静かに同居している」と言ってくださいました。あのコスモスは、きっと誠一から私への最後の贈り物でした。

当たり前の毎日が宝物だった

七十七年の人生を振り返って思うのは、「普通の日々がいちばん尊い」ということです。特別な冒険もなければ、歴史に名を残すようなこともしていません。でも、家族と過ごした当たり前の毎日が、かけがえのない宝物だったのだと、今ははっきりとわかります。

湯たんぽを作ってくれた母。「あなたの文章には温度がある」と言ってくれた山田先生。おにぎりを握ってくれた石川さん。本の話と一緒にしてくれた誠一。私はいつも、誰かに支えてもらってきました。



家族への感謝を込めて

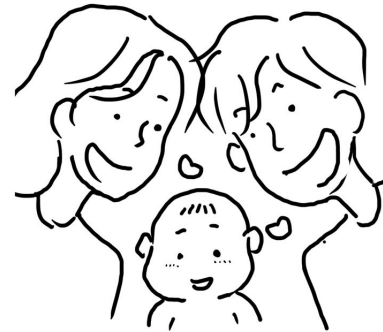
健太へ。あなたは私の誇りです。あの参観日の作文は、私の一生の宝物です。今でもあの作文用紙は、引き出しの奥に大事にしまっています。

美咲へ。「今からでもなれるよ」あの一言を、何十年もお守りのように持っていました。小説家にはなれなかったけれど、こうして一冊の本にできたのは、あなたのおかげです。

陽菜へ。おばあちゃんの初孫。あなたが生まれた日、病院で抱っこした時、健太を初めて抱いた日のことを思い出しました。命はこうして繋がっていくんだね。あなたの笑顔は、おばあちゃんの元気の源です。これからも自分の道を堂々と歩いてください。

そして、誠一さんへ。三十六年間、ありがとう。あなたは口下手で、不器用で、「ありがとう」もろくに言えない人でした。でも、毎年の誕生日に届く丸善の紙袋。大窪寺で握ってくれた手。あなたの愛情は、いつも言葉の外側にありました。あなたがくれた本は、全部まだ本棚にあります。一冊一冊に、あなたとの思い出が挟まっています。天国でも、面白い本を見つけたら教えてね。いつかまた会えたら、今度は私が本を選んであげる。

田中幸子



七十七年分の記憶を振り返るのは、
思っていたよりずっと大変な作業でした。
楽しかったことよりも、
忘れていたかった辛い記憶が先に蘇ってきて、
何度も手が止まりました。

でも、話し終えた後は不思議とすっきりしていまし
た。
自分の人生を誰かに聞いてもらうというのは、
こんなにも心が軽くなるものなのだと知りました。

この本に書かれていることは、
特別なことは何ひとつありません。
でも、私にとっては全部が大切な記憶です。

いつか私がいなくなった後、
この本を開いてくれる人がいたら嬉しいです。
「おばあちゃんも若い頃があったんだな」と、
少し笑ってくれたら、それで十分です。